

# 「あの夏 60年目の恋文」を

## めぐる追想の前・後日譚

浅田高明

恋文と言っても別に私のものではない。以前、つまり平成十六年九月十六日(土)夜九時から十時十分までNHKテレビ番組で放映されたドキュメンタリー・ドラマの中で、かつてN女子高等師範学校の教生だった園師の女性に宛てて、その付属国民学校の児童だった一男性が書いた懐旧、敬慕の手紙のことである。多分、このドラマは見られた方もかなりおられ、ああ、あれかとお気付きの向きもきつと多いのではないか? とは思つが、一応、そのあらすじを述べておこう。

平成十五年八月二十二日深夜、岩波映画に属して文化・産業映画などを制作しておられたH・I氏は、そのちょうど一週間前の十五日にNHK終戦記念特集として再放映された

番組「私の太平洋戦争 昭和万葉集から」の録画DVDを再生、視聴していた。

本番組は昭和五十四年八月に放映された「戦争を伝える」シリーズ、NHKアーカイブ・フィルムの一つである。

番組の半ば過ぎ、女性ナレーター・奈良岡朋子が詠み挙げる一首の短歌とともにその詠み手の名前と姿が映し出された瞬間、彼の目は思わずテレビ画面に釘付けになり、心臓が高鳴った。

君が機影ひたとわが上にさしたれば

息もつまりてたちつくしたり S・K

この女性歌人S・K氏こそ、遙か五十九年前の夏すなわち昭和十九年六月末から戦時下による半年繰上げ卒業の九月まで、H・I氏の通った国民学校四年男子組(略称・ヨندان)に教育実習生として配属され、卒業後間もなく航空隊勤務のK海軍士官と結婚されたS・Y先生だったのである。

遠い少年の日、その輝く知性と美貌に憧れて、幼い胸をときめかせたあの教生のY先生、テレビ画像とは言えはからずもその紛れもない彼女の姿にまみえたI氏は、字幕にあったH市を頼りに今は歌人であり児童文学作家、かつエッセイス

トとして名を成しておられるS・K先生の住所を突き止める。そして彼女がS・Y先生本人であることを確信して、六十年ぶりの手紙をしたためたのであった。それをしおにS・K先生とH・I氏との間に文通が始まり、おおよそ一年を経た晩秋の一日、二人は遂に懐かしい念願の再会を果たすことになる。そして彼らはその足で先生の実家である京都・松ヶ崎のY家を訪ねる。ややあつて疎水辺り閑静な住宅街の一角、小



さな表札を掲げた木造の門構えの家の前で、今は年老いて好々姥と爺となった古の師弟が仲むつまじく寄り添って、たまたまそこで遊んでいた近所の少年にカメラのシャッターを押してもらつた場面が映し出された。

その途端 劇外劇？ ならぬ私もまた思わずハツとして身乗り出し、テレビ画面に食い入ったのであった。

一瞬、何かが脳裡をよぎつた。が、もつひとつはつきりしない。苛立つ気持と、同時にもっと落ち着きよく考へて想い出さねばという気持が、しばし目まぐるしく交錯した。

わかつた、やっぱりあそこだ、あの家に間違いない。番組の最初から、何か心の隅にわだかまっていたあの感じ、Yと言つ通常はそんなに存在しないむしろどちらかと言えば数少なく珍しい部類に属するものの、私には決して初耳ではない、確かに一度はどこかで聞き、はたまた目にした覚えのあるその苗字、おぼろげだった記憶がその時急にまざまざと甦ってきたのである。

話は半世紀以上も前に遡る。昭和三十年春、私は大学付属の結核研究所臨床部門の内科へ同郷の親友U君を誘つて入局した。彼は高等学校時代の同級生だが大阪大

学医学部出身だった。したがって大阪から引越してきた彼は、学生時代からずっと京都暮らしだった私と違って、まず下宿探しから始めねばならなかった。そのころ私は左京区下鴨の高野橋たもとを川沿いにやや南に下がつた辺りの玄人下宿屋に寄宿していた。そこで二人は最初ひと月ほど同室生活をしながら、市内をあちこち下宿探しに歩き回っていた。

折しも私たちのT主任教授の内科外来へ通院中の女性患者にYさんという方がおられた。時たま彼女は自宅の空き間を貸すための適当な下宿を探しておられたが、受診の際に主治医のT教授にもその依頼を持ち出されたのはまことに幸運だった。教授から紹介されて、新人局医師U君の下宿はたちどころに決定した。新米とは言え、主治医の弟子で結核病字専攻の医師とあれば、Yさんにとっても何かと都合で心丈夫だったと思われる。

更に幸いだったのは、Y家が私の下宿からそう遠くない、歩いてほんの十四、五分くらいの場所にあつたことである。その辺の地理を勝手知った私は、早速、彼を案内してY家を訪問したのは言うまでもない。

実は今、話題に挙げているS・K先生の兄上がその家の主通院なさっていたのはそのご夫人すなわち先生の義姉に当たられる方だったのだが、当時はもちろんそんなことは知る筈

もなかった。その後何度かY家の友の部屋を訪ね、ご夫人に会う機会もあったとは思うが、なにしろ五十年前も前の出来事ゆえくわしい経過は尽く忘れてしまっていた。かくして只ひとつ覚えていたのは、かのYという姓のみの表札を掲げた木造の門構えだけだったのである。

突如、テレビ画面に現れたY家の門、以前何度か実際にくぐったことのあるその門を目の当たりにして私は感無量であった。青雲の志を抱いて勉学の道にいそんでいた若き日々が、走馬灯の絵のように目まぐるしく瞼の裏に行き交つたのであった。

さて、そもそもY家の祖先は、奇しくも私の故郷・北陸富山出身なのである。

この事実を私は十数年ほど前、図書館で偶然に見つけた、越中百家 上・下巻（富山新聞社、昭和四十九年刊）を読んで初めて知った。この本は、富山県の生んだ優れた人材とその母胎になった有名家系を選んで二年間連載した新聞の特集記事をまとめたものであり、その下巻中の五十家の一つにY家が「学者の系譜・Y家（宇奈月）一族を支える」空華の精神」として六ページにわたって採り上げられていたのである。

以下少し関連資料を併せながら、その記事内容を紹介して

みよし。

Y家は遠く十五世紀末、霊峰北アルプス連山の麓、清流黒部川沿いに位置する富山県下新川郡宇奈月町浦山の浄土真宗西本願寺派白雪山善功寺(ぜんぎょうじ)の開基である慶祐法師を第一世とする由緒ある学僧の家柄である。

JR富山駅と秘境黒部峡谷の玄関口にある宇奈月温泉駅を結ぶ富山地方鉄道本線の「浦山」駅、その鄙びた山里の小さなトタン屋根平屋建て無人駅舎から歩いてほんの数分、県道十四号・黒部宇奈月線沿いにある当善巧寺境内を入って正面の本堂伽藍に向かつてすぐ左側、壮大な石組の上に「明教院釋僧鎔慶叟」と刻まれた石碑が建っている。かつて全国に門弟三千人を擁した「空華廬」創設者である名僧、第十一世僧鎔の碑である。彼は享保八年、越中国水橋(現・富山市)に生まれ、本名は渡辺与三吉・慶叟、二十一歳で善巧寺へ入寺、やがて上洛、先輩の師僧撲へ入門して僧鎔と名乗り、学林後の龍谷大学での講義により一段と評価された。宝暦八年ころ自坊に字塾「空華廬」を設立、多くの学僧を育てその生涯に百冊余の書物を著した。安永三年、飛騨の古川で起こった教会上の紛争の説得に努め騒動を不発に導いたが、天明三年、再度の騒動発生に際して本山からの命による派遣の途上で病に倒れ、間もなく入寂した。享年六十一。没後、明教院と贈り名された。

静かに瞑想、思考することを意味する仏教用語「空華」の精神をバックボーンとする学僧の系譜、Y家の第十九世はちょうどS・K先生の父君に当たる方で明治十三年生れ。私の母校・県立富山中学校卒業後、一高、東大へ進んだ俊才、四高、六高教授を経て京大文学部教授となった。京大在任中ドイツのライプツヒヒ大学に留学、わが国におけるドイツ中世文学研究の先駆的存在。ゲーテ著『詩と真実』の翻訳者、かつ日本ゲーテ協会創立者の一人でもある。昭和十九年、京大退官後帰郷して善功寺任職に就いたが二年後に亡くなった。

ところで、S・K先生には三人の兄と一人の姉ならびに一人の妹があり、ご本人は第五子に当たり父親が六高在任中の大正十三年、岡山市で生れている。

先に述べた、つまり私たちが訪ねた折の昭和三十年に京都・松ヶ崎のY家に住まいしておられたのが一番下の三兄。その上の次兄は高校時代の学生運動や太平洋戦争敗戦直前の治安維持法違反で、それぞれ京都や東京の警察署に逮捕留置された体験を持つマルクス経済学者、戦時中は厚生省人口問題研究所に在職、戦後は黒人問題研究専門家の元専修大学教授でずっと東京暮らしだった。父の後を第二十世として継がれたのは長兄である。彼は明治四十四年の生まれ、京大田辺元教授門下のヘーゲル哲学研究者である傍ら、保田與重郎や亀井勝一郎らの文芸雑誌「日本浪漫派」の論客としても知ら

れている。特に福岡高等学校時代以来、檀一雄とは親友でその後の文学活動をともにし、私的交流も続けた。

檀一雄(1)(2)は明治四十五年二月三日、山梨県南都留郡谷村町(現・都留市)生まれ。大正六年父の転任に従つて福岡市へ、次いで大正八年栃木県足利市へ移住する。そのころ母トミが子どもを残して家出離別、大正十三年になつて福岡市に住む貿易商の高岩勳次郎と再婚する。昭和三年春、檀は足利中学校四年終了をもつて母親が居る地の福岡高等学校文科乙類に入学する。

時あたかも大正十四年三月治安維持法公布施行以来、政府当局の言論思想弾圧は日増しにその度を加速しつつあつた。とりあえず檀の高等学校在学時に的をしぼつて、少しその辺りの状況を記してみよう。(3)

昭和三年三月十五日、日本共産党員の全国的な大検挙(三・一五事件)が起こる。四月、文部省は学生、生徒の思想匡正を訓令。東大新人会、及び京大、九大、東北大の各社会科学研究会に解散命令を出し、河上肇、大森義太郎、向坂逸郎らの進歩的学者が大学を追われる。六月、治安維持法改悪、死刑・無期刑が追加される。七月、全国警察部に特別高等課新設。司法省、思想係検事設置。十月末、文部省は思想問題対処のため学生課を設置。全国の大学・高専に学生(生徒)主事を配置する。十一月末、小林多喜二が『一九二八年三月十

五日』をナツプ(全日本無産者芸術連盟)機関誌「戦旗」に掲載発表。そして翌昭和四年三月には労農党代議士・山本宣治が右翼団体の男に刺殺され、四月十六日には再び共産党員の大規模検束(四・一六事件)が起こり、翌昭和五年一月から七月まで続いた全国的な大量検挙逮捕により、遂に日本共産党は壊滅的な打撃を被るに至つた。

その年五月には東大の山田盛太郎、平野義太郎、法大の三木清らが共産党シンパ事件で検挙される。八月、新興教育研究所設立、プロレタリア教育運動を推進。昭和六年七月、文部省内に学生思想問題調査委員会設置。十一月にはナツプ解散、コップ(日本プロレタリア文化連盟)が創立結成される。この間、全国殆どの高専・大学では革新・自由思想、言論弾圧への反対抵抗、自治擁護のための学生運動や同盟休校が澎湃として湧き上がり波及していったのである。

昭和四年十一月末、共済部設置にからむ檀らの福岡高等学校同盟休校事件に相前後して、浦和、松江、姫路、高知、第六、翌昭和五年に入つてからは富山、松山、第三、台北の各高等学校や早大、日本女子大などでやはり次々と同盟休校が発生し、それに伴い多くの学生処分が行われていた。

御多分に洩れず、檀もまた学校当局より社会主義運動の首謀者と看做されて昭和四年に一週間、同五年に一年間の停学処分を食らっている。この第二回目の処分を彼とともに受け

たのが同級の親友Yだったのである。後にYは、二人の処分が放校になった他の学生に較べるとずいぶん軽かつた理由を、自分の父が当時京大の講師、おまけに檀の父親や叔父もやつぱり教育者だつたためではないかと述べていたとか。昭和七年檀は東大経済学部へ入学するが、本心は親友Yとともに京都へ行き、彼の父が在任中だつた京大文学部独文科へ進学、ドイツへの交換学生留学を希望していたらしい。

東大在学中の昭和九年、檀は古屋綱武・綱正兄弟及びYとの四人で、生母高岩トミからも援助を仰ぎながら季刊文芸同人誌「鵲」を創刊したが、たちまち資金繰りに困り第一集をもつて廃刊となる。だがその際、古屋を通じて生涯の友となつた大宰治(4)を知り、たちまちその文才に惚れ込んで彼の作品『葉』を第一集・春号に、『猿面冠者』を第二集・夏号に収載することになる。Yは創刊号に評論『作家精神の一つの面』と文学時評『志賀氏の「日曜日」評』を投稿している。その年末、檀はまたもやYや大宰治、山岸外史、中原中也、今官一、森敦らと一緒に文芸誌『青い花』を発刊、大宰治の『ロマネスク』やYの『ナポレオンとラスコリニコフ』などを載せた創刊号のみで休刊、間もなく廃刊に追い込まれて、大宰、山岸や檀、Yたち同人の一部は、昭和十年五月からの「日本浪漫派」第一巻、第二号へと合流することになる。Yは合流直後の五月号に『なまけもの感想』を、翌十一年一

月発行の第二巻、第一号へは、『浪漫的精神』を寄稿している。

なおYと大宰治の最初の出会いは、昭和十年京大文学部哲学科卒業後、檀と連れ立つて東京世田谷の経堂病院へ虫垂切除術後に併発した腹膜炎と肺結核で入院加療中だつた彼を見舞つた時だつたという。

その後Yは立命館大学教授に就任、哲学を講じながら京都暮らしが続いたが、戦後の昭和二十一年父の死去で帰郷して善功寺を継ぐことになった。傍ら富山県教育委員長を務め、はたまた富山大学講師としてドイツ語の教鞭を執り、富山女子短期大学で哲学を講じたりもした。

檀との交流はその後も続いた。昭和二十三年に善功寺を訪れた彼は二月月間滞在して『佐久の夕映』を執筆し、あるいは近くの富山県朝日町で発生した事件に取材、ヒントを得た短篇『尼僧殺し』を発表、更に昭和三十五年に再訪した折には、檀流クッキングの腕前を披露しながらの料理講習会を開いたりもしている。

さて無頼派作家檀一雄と言えば、絶筆となつた小説『火宅の人』がすぐ頭に浮かんでくる。彼の没後十年に当たる昭和六十一年、この作品は東映映画会社の高岩淡企画、深作欣二監督によつて映画化され、檀の長女ふみも、平成二十一年秋に亡くなつた女優・緒方拳扮する桂一雄(檀一雄がモデル)の母親役として好演している。

檀ふみが女優となったきっかけには、この映画の企画者である高岩淡（現・東映会長）が大きく影響している。

昭和四十五年、大阪・千里で開催された日本万国博覧会を見物しての帰途、彼女は祖母トミの息子である高岩淡（父一雄の異父弟）が、当時、所長をしていた京都太秦の東映京都撮影所を訪れた。その際、ふみの容姿が某プロデューサーの目にとまり、女優としてのスカウト懇望がその二年後正式に、所長を通して父親の檀一雄へもたらされたのだった。昭和四十七年、彼女は高倉健主演、昭和残侠传「破れ傘」でデビュー、以後映画スターへの道を華々しく驍進し、テレビや芸能マスコミの世界で一躍売れっ子になってゆくのである。

この高岩淡は京都撮影所時代、嵐山の近くに住んでいた。京都市右京区嵯峨北堀町にあった日本住宅公団・京都嵯峨住宅の一角である。もともと此処は、日本のハリウッドと呼ばれた映画製作のメッカ・太秦に近かったため、若手のシナリオライターやカメラマンから助監督クラスの映画人たちが多数住んでいた。

たまたま私も空き家抽選に運良く当たった結果、昭和三十六年から同四十三年まで当団地に入居していたのである。

思えばあの頃はまだ電話の普及率が極めて乏しく、各戸に一台などはまさに夢のような話、とてもそんな贅沢は考えられない貧しい時代だった。もちろん我が家にも電話はなく、

その節団地の世話役で事務連絡所を兼ねておられた高岩家の電話を緊急呼び出し用にお願していた。昭和三十七年暮れ、つすら寒い小雪の舞う夕方に故郷から突然の長距離電話で、父親が死の病いに斃れたという悲しい知らせを聞いたのも高岩家の玄関先だった。その黒く硬い冷たかった受話器の手触りだけは未だに決して忘れることが出来ない。

高岩の企画、制作あるいは総指揮になる東映映画には、「野菊の墓」（伊藤左千夫原作、昭和五十六年）や、「わが愛の譜 瀧廉太郎物語」（郷原宏原作、平成五年）、「鉄道員」（浅田次郎原作、平成十一年）、「長崎ぶらぶら節」（なかにし礼原作、平成十二年）などの文芸もの、殊に敗戦時、熊本幼年学校一年生だった彼の鎮魂の思いと非戦の願いが籠められた「きけわだつみの声」（再映画化版）（平成七年）、「ホタル」（平成十二年）、そして最新作「男たちの大和」（平成十七年）の戦争三部作、他数々の大作がある。

ここではその中の一つ、やはり日本アカデミー賞助演女優賞に見事輝いた檀ふみが出演している「わが愛の譜 瀧廉太郎物語」（澤井信一郎監督）についてちょっと触れてみたい。

風間トオル演じる瀧廉太郎の学友、東京音楽学校教授で第一回欧洲音楽留学生の幸田延（文豪幸田露伴の妹）役に檀ふみが登場、彼女の妹、映画では姪の中野ユキになっている。幸が第二回留学生、第三回留学生の廉太郎は宿痾の肺結核再燃によ

り志半ばで帰国、恋人の幸に捧げる曲「憾(うらみ)」を遺したまま二十三歳で夭折するという内容の音楽映画である。

チャイコフスキーやショパンの各ピアノ協奏曲第一番、ベートーヴェンの交響曲第五番 運命、ピアノ奏鳴曲第二十三番 熱情 アパツシヨナータ やシューマン、リスト他のピアノの名曲がふんだんに挿入され、ドイツロケの美しい風景と相俟って香り豊かな佳品に仕上がっている。

ところが、この瀧廉太郎(5)(6)、若き日の一時期を富山で暮らしている。彼の父・瀧吉弘が明治十九年八月、富山県書記官として赴任、一家は富山市千石町の官舎に移住する。七歳の廉太郎は同年九月、旧富山城内にあった富山県尋常師範学校付属小学校第一学年へ二期から転入。明治二十一年四月に父の退職で上京、四月に東京市麹町尋常高等小学校第二学年へ転入学、五月に第三学年へ進級するまでの一年八月を富山で過ごしている。

後に彼が作曲した組曲「四季」中の 花 月 や 雪、「雪やこんこん」「お正月」「雁」などの诗情あふれるモチーフには、かつて廉太郎少年の目に焼き付き心に深く刻み込まれていた富山の鄙びた自然の風物詩も大いに関与していたのでは?と思われ、また東くめ作詞になる 納涼の「ありそ海」なる詞も万葉歌に歌われ越中の歌枕でもある「荒磯」に何か関連しているのかも知れない。

加えて土井晚翠作詞・瀧廉太郎作曲「荒城の月」の城郭のイメージに、土井は仙台の青葉城や会津若松の鶴ヶ城を觀たらしいが、瀧は更にそれへ父の転任先であつた富山城、大分の府内城、竹田の岡城や東京の江戸城などを重ね合わせ、特に幼き日に通つた小学校がその敷地内に建ち、かつ生まれて初めて見る城郭であつた富山城(江戸期、外様大名の雄・加賀百万石前田家の支藩、十万石富山藩主居城)がとりわけ強い印象を与えたのではなからうか?とも思えてならないのである。

話が半分横道にそれたので、ここでドラマ中に語られた先の平成十五年夏再放映のNHKテレビ番組「私の太平洋戦争 昭和万葉集から」の由来本筋へ戻り、その要点を述べることにする。

昭和五十四年二月、講談社創業七十周年記念事業出版『昭和万葉集全二十巻・別巻一』の刊行が、第一回配本、巻六太平洋戦争の記録(昭和十六年〜二十年)をもつて開始された。

直後から、NHKはこの歌集に寄せられた多くの短歌の作者や親族を訪ね歩いて、それぞれの歌に秘められた三十余年來の思いを掘り起こし、改めて激動の時代を生き死にした人々の嘆き、悲しみ、痛み、怒り、叫びを画像に表現、集録



したのである。

H・E氏がDVD録画していた同日同時刻、私もまたこの番組をビデオテープに撮りながら視聴していた。

約一時間近く続く画面に次々現れる短歌の詠み手・作者には、土岐善鷹、湯川秀樹、徳川無声、野間宏や杉本苑子など少数の有名な人もいるものの、殆ど多くは名もない一般庶民の方たちばかりである。

戦地へ赴いた親兄弟あるいは夫の身の上を思つ子や妻の歌戦場における下級兵士が故郷に残した肉親や負傷した戦友を案ずる歌、女や子供、年寄りたちが銃後の耐乏生活の苦境を乗り越え、励まし合う歌、そして被爆被災の残酷悲慘さを只じつと見つめ、耐え忍ぶ無念慟哭の歌等々が、時に「愛国行進曲」や童謡唱歌「お山の杉の子」そして戦時中のラジオ番組 前線へ送る夕 の主題前奏曲であった「ハイケンスのセレナーデ」などをバック・ミュージックにしながら紹介されるのである。

S・K先生の短歌が出てくるのは、番組が始まって約四分過ぎの辺りである。奈良岡と組んだ男性ナレーター・宇野重吉の問いかけに、彼女はやはやかにみながら「上空を飛び過ぎて行く夫の飛行機の影の中に包まれたその瞬間、ほんの一瞬だったけどとても嬉しかった」と語り、次いですぐさまその一式陸上攻撃機(7)の型と大きさをすらすら答えてい

る。

「巻六」の一〇六ページ 戦場への思い 夫を思つには、先の短歌に加えて

全長25全幅20高さ5と

わがそらんじし君が機の型

眼路のかぎり生きの命のかぎりかと

爪立ちあぶくきみが機影を

君が機の海と空とにまぎれ入り

われはうつけて砂の上であり

の三首が挙げられている。

ところで、続くそのすぐ後の画面に現れる被爆者豊田清史こそは、私が夙に知遇を得、尊敬して已まない広島島の反戦戦人なのである。

アー水ヲクレマセンカア咽ノド

痛イイ夜カ明ケンノウ

「巻七」の《 敗戦前夜 広島 》に採録された彼の絶叫が、テロップ文字で画面上を横に流れるとともに、原爆の悲惨さを訴え核廃絶を願つ豊田の真摯な顔がクローズアップさ

れる。

昭和二十年八月六日朝、広島師範学校付属国民学校教師だった二十四歳の彼は広島駅東方、爆心より一・七キロメートルの地点で被爆する。幸いにも足の負傷のみで生命は助かった。



たものの、以後三ヶ月間骨と皮だけになって生死の境をさまよう。

彼は、その画面で、「仮名で書く方がより事実に近い」と語っているが、作家原民喜もまた仮名で『原爆被災時のノート』を綴り、作品『夏の花』中に廢墟と化した市内の様相を「この辺の印象は、どつも片仮名で描きなぐる方が応しいようだ」として

ギラギラノ破片ヤ 灰白色ノ燃エガラガ

ヒロピロトシタ パノラマノヨウニ

アカクヤケタダレタ ニンゲンノ死体ノ

キミヨウナリズムム スベテアツタコトカ アリエタコ

トナノカ パット剥キトツテシマッタ アトノセカイ

テンブクシタ電車ノワキノ 馬ノ胴ナンカノ フクラ

ミカタハ ブスブステケムル電線ノニオイ

のよつな一節を挿入しているのが想い出される。

なお吉田満の痛恨の著書『戦艦大和ノ最期』も、やはり全文片仮名書きである。

いったい人は生死の関頭に立ち、ぎりぎりの切迫緊張した状況に至ると自然本能的に、よりリスミカルで簡潔直截的な片仮名表現を用いるようになるのだろうか。

豊田は、その後も原爆症に悩み苦しみ、何度も入退院を繰り返して大手術を受けながら反核、反戦平和運動の旗手として活躍する。市立職町中学校在職時の昭和二十年、教え子の佐々木禎子が原爆症の白血病で死去すると直ちに、広島平和をきづく児童・生徒の会、結成世話人となって、三年後に平和記念公園内に「原爆の子の像」を建立した。その運動は現在も「原爆の子の像と折鶴の会」へ引き継がれている。かたや彼は陶磁器の研究者であり、書家でもある。昭和四十七年には広島市から委嘱され原爆慰霊碑の過去帳を筆書している。

一時、梶山季之らと「広島文学」を編集し、同人事務局長

にも収まった。現在、短歌と評論誌「火幻」を主宰、多くの歌集や文学評論・学術書を著している。

この『昭和万葉集』には、他にも彼の短歌が多数採録されているが、とりあえず「巻十」の《 死の灰の恐怖「広島」より》の二首

仰向けに陽に並べられたる少年の

眼つむり絶えて陰みな黒き

「過ちは繰返しませぬ」と誰にいふ

屍の上を軍靴踏みゆくに

と「巻十五」《 戦争の傷痕 原爆の傷痕 》の

わが内耳溶かさん夜々の響きをも

二ころろしめ聴く冬弥撒の鐘

の一首の計三首を掲げておく。

そして更にせひとも記しておかねばならぬことは、井伏鱒二著『黒い雨』の種本となった「重松静馬日記」に関わる一件である。井伏の作品は、豊田が浄書させ送らせた親友重松静馬の日記他を基にして出来上がったものである。

殆ど七割強の日記原文をそのまま無断で流用、剽窃、盗作したという事実を告発して、執拗に文壇の大家や取り巻きの

売れっ子評論家たちと出版企業界に激むどす黒い霧に立ち向かい、孤軍奮闘し続けているのもまた他ならぬ彼自身なのである。まことに反権力の熱血正義漢、豊田の面目躍如たるものを感ぜざるを得ない。

私の連想の余波はまだまだ続く。

卒業後のS・Y先生は、やがて結婚されるまでの二ヶ月間を母校の京都府立第一女学校に在職された。わが国で最初に創立された自由主義の気風と伝統にあふれる女学校である。

戦後、学制改革で男女共学のO高等学校へ生まれ変わったこの学校に勤めておられたH先生は、偶然にも私の中学校時代のクラス担任の恩師だった。

同志社大学を出られた先生は、暫時、府下の某女学校で勤めた後に、遙々、北陸富山の中学校へ赴任された。悪餓鬼ともだった我々にせがまれて、よく「同志社カレッジ・ソング」を英語で歌ってくださったことが懐かしく想い出される。ただ戦時下、英語教師だったがために大層肩身の狭い思いをされ、配属将校からも白い眼で見られていたらしい噂もたびたび耳にした。敗戦直前に帰洛され、やはりY家のある松ヶ崎の地内に住んでおられた。

五年後、京都に学ぶことになった私は、はしくも先生と再会の機会を得た。遊びに行くといつも北の雪国時代の話に

楽しい花が咲く一方また、教職員組合の副委員長としても活躍されていた先生からは何かと社会主義的思想の常識を教えられて、しばしば己れの政治音痴を思い知らされたものだった。

やはり当時、府会のE革新代議士とすこぶる昵懇だった研究所時代のA助教の住まいもすぐ側だった。動物実験や論文作成に際しては直接指導を戴いたが、敬虔なクリスチャンだった彼は、正月元日はおろかクリスマスの日も必ず研究室へ出勤、仕事を休まれるのを殆んど見たことがなかった。

いつかクリスマス・イブの夜遅く、相変わらず研究室の灯が点いていたので、ちょっと覗いて、「先生、今夜はお帰りにならなくてもいいんですか?」と言ったら、「私は、今朝もつ禮拜をすませてきましたよ。イブだからと言って、何も町をつろついでお酒など飲まなくてもね……、まだ仕事一杯たまっているしね……」と答えながら、悠然と本を読んでおられた姿が、今もって鮮やかに臉に焼きついている。

更に懐かしい思い出が甦ってくる。

小、中、高等学校、そして学部こそ違うものの大学もまた一緒だった畏友F君がいた市電 系統・東山線高木町電停傍ら、松ヶ崎近辺の下宿二階へもよく遊びに行った。政治、経

済、社会、思想、文学・芸術、学生運動等々、夜を徹してのかまびすしい論争で、私はいつも彼の理路整然たる鋭い舌鋒の軍門に降らざるを得なかった。法学部を終え、やがて青年法律家協会所属の判事となった彼は、札幌地方裁判所在任時の昭和四十八年九月、「自衛隊のナイキ・ハーキュリーズ基地建設は憲法違反」と言つあの長沼訴訟判決で、一躍勇名を轟かせて時の人となり私たちを驚かせたものだった。(8)

そう言えば、岩波映画時代の昭和三十九年、先年亡くなつた反戦と自由の土・黒木和雄監督の名篇ドキュメンタリー・モノクロ映画「とべない沈黙」(一〇〇分、日映新社制作、ATG公開、昭和四十一年(9)(10)に参画して、松川八洲雄と組んで脚本を担当し、助監督を務めたのも他ならぬ彼と同じ「青の会」メンバーだったH・I氏である。

北海道には決して棲息しないナガサキアゲハ蝶を必死になつて捕らえ学校へ持参した少年は、先生たちから実はどこかで買ったかあるいは盗んできたものではないか? と怪しまれて煩悶する。一転した画面で、ザボンの葉に止まったナガサキアゲハの幼虫が、長崎から汽車に乗って運ばれ萩、広島、京都、大阪、そして、突如、長駆して香港へ、再び横浜・東京へ戻つて、空路遂に千歳へ到着する。その列島縦断の旅路にあつて、加賀まり子扮する美しいアゲハ蝶の妖精化身は、

敗戦後日本の政治経済状況における幾多の整米と低迷、度重なる革新運動の昂揚と挫折を遍歴体験し、墮落俗塵に押し流される類癩風潮や泰平ムードに遭遇する。

世のいわゆる正論と称するものと曰ころ関わっている現実との角逐葛藤の数々、知性と心情の交錯と離反や齟齬軋轢、孤独な魂の沈黙の漂泊を描いたこの現代文明と社会世相批判のオムニバスのストーリーは、(突如、国会議事堂内衆議院での強行採決時の議長席を取り囲む与野党掴み合い模様)、二ユーエ画像や、東京湾内を進む原子力潜水艦、都内における自衛隊の戦車隊列行進の映像なども挿入されていてかなり観念的で難解である。

だが戦後の一時期、日本が掲げた民主主義と文化平和国家への強烈鮮明な希求、願望が、ともすれば単なるノスタルジアと幻想の彼方へと遡及、かつ没落してゆく心象風景だけは、(例えば、冒頭、北海道の明るく輝く広々とした原野に舞い飛ぶ綺麗なアゲハ蝶を懸命に追い掛け続け、次いでその蝶の生態に関する真偽と夢想・希望の狭間に苦悩する少年の描写)の顔と姿を持ち前の記録映画独特の手法を存分に駆使して描く見事な詩的シーンなどのカメラワークに照らしても、結構、映し出すことに成功しているのではなからうか。

この映画を作ったモチベーションには、当時の政治状況にたいする私なりの危機感がありました。(中略) 憲

法九条で「戦争放棄」したにもかかわらず、国民の知らないところで有事立法の策定が検討されていたことに、私はふたたび、「いつか来た道」を歩むのではないか、戦後民主主義が否定されることへの不安がありました。

自衛隊の戦車が出動して東京が戒厳令下に置かれている状況を描いたのも、こうした「明日」への強い危機感があつたからで、モチーフに重ね合わせて描いたのです。

と、後に黒木もまた時代逆行への無気味な予感を語っているのである。

加えてH・I氏には、反戦自衛官小西誠三等陸曹の裁判闘争に資料を得た意欲作映画「叛軍NO・4」(九八分、一六ミリフィルム、昭和四十七年)があることも記憶に留めておきたい。

平成十七年五月、冒頭に記したNHKテレビドラマのいきさつが、その後先生の手元に保存されていた「教生期」ノートからの一部抜粋をも併載してS・K、H・I両氏の共著『あの夏、少年はいた』(れんが書房新社)として一冊に編まれ刊行された。

二人の間に交わされた往復書簡や日記の文面からは、昭和十九年初夏、戦争の雲行きもようやく急を告げサイパン島が陥落し東條内閣は総辞職した頃にもかかわらず、そんな時代

の暗さを一気に吹き飛ばすような師弟の間に萌え立ち輝く青春の息吹が感じられ、半世紀以上に及ぶ互いの波乱に富んだ人生の年月を超えてなお、鮮烈に響き合う想いのだけがまざまざと読み取られて痛く胸を打つ。

本ドラマを觀賞し著書を紹解いた私もまた、同じ激動の昭和年代を生き抜いてきた者の一人として、深い感慨を覚えざるを得ない。Y家を発端として故郷富山、結核研究、戦争、そしてライフワークの作家太宰や檀など、いささか連想ゲーム的な発想をもってわが来し方の心に浮かぶ由なしことを綴つてみた次第である。

S・K先生、H・I氏、お二人の幸せなご邂逅を心よりお慶びし、未長いご健勝を祈つて已まない。

#### 〔付記〕

実は本稿に関して、最初、かなり似通つた私自身のまさしく六十年の星霜を閲し、北陸隣県K市のA川畔にまつわる或る貴重な音沙汰から奇しくも甦つた旧い高等学校時代の体験事実をも又書き添えるつもりだったが、結局、割愛し別の機会に譲ることにした。

かつて若き青春の日における、今尚臉の裏に揺曳する緋色の日傘の君、懐かしくもほろ苦い想い出は、やはりただ独りわが心の奥底深く遙かモラトリアムの彼方へ、いついつまで

も美しくかくわしい夢のままにそつと閉まつて置きたいような気もするので……。

なお、本文中に引用した著書以外に次の諸資料をも参照した。

- (1) 『檀一雄全集』(沖積舎、昭61・1)
- (2) 野原一夫『人間 檀一雄』(新潮社、昭61・1)
- (3) 旧制富山高等学校思想文化運動史編集委員会編『旧制富山高等学校思想文化運動史』(新興出版社、昭56・10)
- (4) 『第十次太宰治全集全十二巻・別巻一巻』(筑摩書房、平元・6)平4・4)
- (5) 海老沢敏 瀧廉太郎 夭折の響き』(岩波書店、平16・11)
- (6) 山田野理夫『荒城の月』(恒文社、昭62・5)
- (7) 雑誌『丸』編集部編『銀河ノ一式陸攻』(光人社、平12・11)
- (8) 福島重雄他『長沼事件平賀書簡 35年目の証言』(日本評論社、平21・4)
- (9) 佐藤忠男『黒木和雄とその時代』(現代書館、平18・8)
- (10) ATG Film Exhibition NO.3  
『とべない沈黙』(京都芸術劇場・春秋座)《京都造形芸術大学内》、平20・6)